本市の公共交通の現状について

H30.9.29　日本海新聞

琴浦町営バス廃線危機

委託会社のドライバー不足
「直営」「タクシー」道探る

琴浦町民の"生活の足"として町内を走る鳥取県中部唯一の町営路線バス（通称・ことうらバス）が、来年度から一部廃線や減便の危機に直面している。現行維持を望む町は、運行委託するバス会社などと協議を進めているが、ドライバー不足を理由に現行での契約更新は困難。町は他業者との契約や路線見直しも思案し、存続の新たな道を探る。（池田悠平）

ことうらバスは、町所有バスによる有償運送のいわゆる「白バス」。2006年度から日ノ丸自動車が受託運営し、運賃は小学生以上一律100円。高齢者など、他に移動手段のない町民に重宝されている。

現在、JR浦安駅やショッピングセンター・アプ[illegible]などを経由する「東伯線」（3路線）、同駅とJR赤碕駅を結ぶ「[illegible]海岸線」、赤碕中と船上山少年自然の家をつなぐ「船上山線」の5路線があり、2017年の利用者は合わせて延べ7万[illegible]人。町は約[illegible]0万円の経費を投じた。

現行維持が危ぶまれている「ことうらバス」＝琴浦町八幡

■契約継続に難色

町商工観光課によると、日ノ丸自動車との契約期間は本年度で満了。同社はドライバー不足から契約の継続に難色を示し、一部撤退も視野に入れているという。以前は路線の一つで、現在は予約型乗り合いタクシー（デマンドタクシー）として形を残す「上中村線」と、遠隔地の児童を運ぶスクールバスを受託する日本交通も同様の理由で撤退を示唆。町は、両社と運行継続に向け協議を進めているが、現行のままでは物理的に厳しい状況にある。同町竹内の女性(90)は「車の免許証を返納してしまい、バスがなくなると買い物に行くのにも困ってしまう」と心配する。

■代替案を模索

町は、運送会社などの事業所に運行業務を打診したり、町がドライバーを募集する直営での継続を検討したりと、新たな手段を模索する。仮に廃線になった場合でも、交通空白地域の住民を対象にタクシー運賃の半額を補助する「タクシー利用助成事業制度」を活用する代替案も計画。利用料は100円ではなくなるが、廃線周辺地域を対象地域に定め、利用者の負担を減らす考えだ。

「年内には結論を出す」とする小松弘明町長。利用者などのデータを精査し、方針を固める考えだが、「ドライバー不足は全国的な問題。全路線維持が最善だが、見直しは避けて通れない」と理解を求める。スクールバスについては「運行維持は必須」と存続を強調する。

H30.12.19　日本海新聞より

大山る～ぷバス運行縮小

採算合わず、運転手も不足
来年度から

JR米子駅や皆生温泉と国立公園・大山周辺の行楽地を結ぶ「大山る～ぷバス」が2019年度から運行規模を縮小する見通しとなっていることが18日、分かった。採算が合わず、運転手の確保も厳しいことが原因。鳥取県西部観光商工課は「運行時期や客層を絞り込むなど効果的な運行体制を検討したい」として、遅くとも来年1月には新たな運行計画案を示す考え。

る～ぷバスは06年、大山寺周辺の行楽地に向けた2次交通対策として運行開始。4月下旬から11月上旬までの土日祝日を中心に、日本交通と日ノ丸自動車が1日計8往復運行している。

日交が2台、日ノ丸が1台の計3台のバスを走らせているが、日ノ丸が採算面と運転手不足を理由に撤退を決定。日交も同様の理由でバスを1台に減らす考えを同課に伝えた。

運行体制の見直しを迫られる大山る～ぷバス＝今年4月

バスの運行は、鳥取県や大山町、伯耆町と沿線の民間事業所などで構成する「大山エリア観光2次交通推進協議会」が1台当たり年間約100万円の運行補助を支給。しかし両社によると、それでも採算が合わず、支給額の引き上げを要望していたという。

日ノ丸自動車米子支店の細田正人支店長は「昨年やめるつもりだったが、大山開山1300年があった。地域貢献したい思いはあるが限界」と話す。

る～ぷバスの利用者は気象状況などで増減があるが、近年は7千人台から1万人台で推移。今年は大山開山1300年の節目で、1万261[illegible]人の利用があった。（高塔正範）